

## 平成22年度 産業廃棄物税基金充当事業 実績報告書

事業名：食品廃棄物含有たい肥の有機質窒素肥料としての活用実証事業

事業実施予定期間：平成20年度から平成22年度

担当課室名：古川農業試験場，農業・園芸総合研究所（農業振興課）

担当班名：土壌肥料部土壌肥料班，園芸環境部土壌環境チーム（普及支援班）

TEL：0229-26-5107，022-383-8121（022-211-2837）

e-mail：hknosi@pref.miyagi.jp，marc-kk@pref.miyagi.jp（nosin@pref.miyagi.jp）

### 1 事業の目的

3Rが進んでいない食品廃棄物含有たい肥について、有機質窒素肥料としての品質評価および水稲・露地野菜・園芸品目での栽培試験を実施し、食品廃棄物のリサイクル推進に寄与するもの。

### 2 当該年度の実施事業の概要

収集したたい肥について、有機質窒素肥料としての品質評価を実施した。また、水稲、輪ギク（施設・露地）、露地野菜（ブロッコリーなど）について、化学肥料と組み合わせた施用方法を検討するため、栽培試験を実施した（水稲、露地野菜の栽培試験は古川農試、輪ギクの栽培試験は農園研で実施）。

### 3 当該年度の実施事業の成果

輪ギク栽培において、たい肥のC/N比を基に栽培期間中に有効な窒素量を求める推定式を作成し、農業者が簡易に資材施用量を設計できるよう、普及に移す技術として提案した（第86号参考資料）。また、未熟なたい肥では窒素肥効判定が不可能であったため、判定可能なたい肥の腐熟度について、既存の簡易判定法での基準値を明らかにした。

栽培試験においては、水稲と輪ギクに関しては化学肥料の30%代替で化学肥料並みの品質、収量が得られると示唆された。ただし、たい肥施用時期と移植時期の期間をできるだけ短くし、たい肥の肥効を低下させないことが重要であると示唆された。ブロッコリー栽培については、化学肥料の30%代替では収量が慣行栽培よりも低い傾向であったため、たい肥と化学肥料の施用量を再検討する必要があると考えられた。その他、本事業成果に基づき下記の発表を行った。

- 1）日本土壌肥料学会 2010年全国大会にて発表（水稲に関してはポスター発表，輪ギクに関しては口頭発表）。
- 2）平成22年度PICSみやぎ研究成果報告書にて報告予定（報告会は東日本大震災のため中止）。

### 4 今後の展開

事業成果を農業者および普及指導員等へ周知し、技術指導等を通じて食品廃棄物含有たい肥の活用推進に寄与する。

5 廃棄物の削減・リサイクル，適正処理の促進の効果等を示す指標の数値  
(指標：たい肥の利用量)

単位：トン/年

平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
3	80	320	500

6 事業費の推移

単位：千円

平成20年度	平成21年度	平成22年度
1,800	2,200	2,182